

●小学校の水泳授業について

Q.

1951年〇〇小学校が全国に大きなショック（5年生の同じクラスの女子児童6名溺死）を与えた水難事件と4年後の瀬戸内海の水難事故とを合わせて、文部省は小学校に水泳授業を取り入れ、二度とこのような悲惨な事故が起こらない様にと始めたのに、60年経っても、小学校では未だに25m泳げないまま卒業させているのが現実です。この問題を新発田市はどのように捉えているのでしょうか。泳げない児童の将来を考えると、不意な事故に合った場合は、生死にかかわることになるのです。何のための小学校での水泳授業なのでしょう。目的が果たされていません。このままほっておくつもりでしょうか。泳げないまま卒業した人達を何としても救わなければなりません。どうにもならないのであればやむをえませんが、短期間で泳げる方法があるので、是非ご検討の程、宜しくお願い致します。

Googleで“ハイハイ泳ぎ”と検索して見て下さい。

最初に卒業している人で泳げない人を救う。

次に小学校に在学中の児童全員を泳げるようにする。

これを可能にする方法にはどんな事が考えられますか？

国語や算数は、家に帰ってから予習復習が出来ますが、水泳はそれが出来ないのです。

是非お考えいただき、教えて頂きたいと思います。

（令和6年6月受付）

A.

市内の小中学校も夏休みに入り、子どもたちが海や川へ行く機会が増える季節になりました。例年この時期には、水に関する事故が増加し、尊い命が失われる大変痛ましいニュースを耳にいたします。そのような悲劇が繰り返されないためにも、子どもたちが身近に潜む危険を学び、有事の際に「自らの命を守る行動を取れるようになること」が非常に重要な視点であることは、御指摘のとおりであります。

このたびお手紙をいただき、学校現場における水泳授業の実態について改めて市教育委員会に確認したところ、限られた授業時間数の中では、全員が泳げるようになるまでの指導は難しい状況にあることから、「泳力の向上」の視点だけでなく、「安全確保につながる運動」についても力を入れて指導を行っていると聞いております。

具体的には、背浮きや浮き沈みをしながらタイミングよく呼吸をしたり、手や足を動かしたりするなど、続けて長く浮くことができるような指導が全小学校で行われているほか、着衣のまま水に落ちた場合の対処の仕方についても授業で取り上げているとのことであり、「ハイハイ泳ぎ」とは異なるものの、御提案いただいた趣旨につながる水泳授業が実践されているものと理解しております。

学校現場では、何よりも「子どもたちの安全」を第一に考えながら、教職員が、日々、精一杯の指導を行っておりますことを御理解いただきますとともに、今後ともお気づきの点がございましたら、御意見をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

（令和6年8月13日回答）

※上記の回答内容はすべて回答日時点のものであり、現在とは異なる場合があります。